



# 読書活動への扉を開く！

No. R6-2

桑村小学校 令和6年4月30日 文責：関口 直

## 味読についてじっくりと考える

### 保護者の感想より

新年度になり、「読書活動の扉を開く」はどうなるのだろうととても気になっていました。また継続して下さることに感謝いたします。味読という言葉が今回初めて知りました。「読書を味わう」ととても素敵な言葉ですね。また親子で本を楽しみつつ、味わっていきたいと思います。今年も親子読書の会があるので楽しみです。

前回味読という言葉を紹介しました。その中で、楽しむの質の高まりを味わうと捉えたいと書きました。これってどういうことなのか？もう少し具体的に考えていきます。

高校時代、国語の教科書に芥川龍之介の「枯野抄」という作品が載っていました。これは、臨終を迎える松尾芭蕉を、その弟子たちが様々な心の揺れや思惑などをもって看取る様子を描いた短編小説です。授業で扱ったので、芥川小説の特徴ある表現の工夫や繊細な人物描写などをとても丁寧に読み込んでいきました。自分はその授業を通して人の死を前にして様々な思惑が絡み合う人間の醜さのようなものを知り、ちょっと恐怖すら感じたのを覚えています。でも、授業の中でしっかりと一つ一つの表現を確認したり、互いに意見交換したりしながら作品を読んでいくというのは、まさに味読です。つまり、国語の授業を受けている子どもたちは、普段からこの味読を経験しているし、それを通して人としての生き方や文学の面白さなどについて学んでいます。



昨年、私が中学生だった頃、国語の教科書に読み物教材として載っていた短編小説のことが気になって、あれは誰の書いた何て題名の作品だったのかととても気になってしまいました。せめて教科書会社でも分かっていたらと思ったのですが、それも分からず、実際に探してみるにも手がかりがありません。覚えているのは、当時は流行っていたロシア文学だろうということと、以下に記すその話の概要です。

ある金持ち実業家と青年法律家が死刑と無期懲役のどちらがいいかについて議論する中で、とんでもないかけをすることになります。死刑賛成者だった金持ち実業家は、無期懲役を主張する青年法律家に、独房生活なんて耐えられるわけがない、もし15年耐えたら大金をあげるというかけです。ちょっとこの後はネタバレしてしまっただけですが、実際に青年法律家は15年間耐え忍びました。そして、明日いよいよその日を迎える時がきました。しかし、すでに事業が傾いていた金持ち実業家はこのままでは自分が破綻してしまうと考え、前日の夜に、青年法律家を殺してしまおうと部屋に忍び込みます。するとそこには痩せこけた顔で眠っている青年法律家がありました。ふと見るとそこには1枚の置き手紙があります。そこに「この15年でいろいろと考えた結果、自ら大金を手にする事拒否し、そのために期限の数時間前にここを立ち去る」と書かれていました。結局、実業家は殺すのを止め、そして法律家はどこかへ消えていき、実業家は青年が残っていた手紙を密かに金庫にしまうという話です。

ロシア文学、短編としらみつぶしに探した結果、この小説はチェーホフの「かけ」という作品だったことが分かりました。もう一回読み返すと記憶違いのところや心理描写などがとても丁寧に描かれていることなどを知りました。みなさんも、似たような経験はありませんか？ここまで古くなくても、以前に読んだ本をもう一回読んでみた経験。一回目とはきっと同じようで違う発見や感動があったのではないのでしょうか。自分はこの複数回読むというのも味読だと思います。

似たような例で、以前、初めて小学校に赴任したとき、子どもたちが「泣いた赤鬼」の劇をやっていました。そのとき、久しぶりに「泣いた赤鬼」を読み返しましたが、小学校低学年では分からない青鬼の心境など、大人になったからこそ分かる奥の深い話でした。この読み返すことによる新たな発見も味読だと思います。また、保護者が子供と絵本を読んでも、同じ絵本について保護者と子どもでは捉え方が違います。それを親子で語り合うなどすれば、やはりこれも味読です。

こんな風に味読の世界は本当にいろいろなところに広がっています。何度か読み返す、じっくり時間をかけて読む、同じ作品を複数人で読むなど、どれも味読につながるものです。みなさんの味読について、その経験などをどうか教えてください。

ヒカリノアトリエ

作詞 桜井和寿 作曲 桜井和寿 歌 Mr.Children

「雨上がりの空に七色の虹が架かる」って そんなに単純じゃない  
この夢想家でも それくらいわかってる

大量の防腐剤 心の中に忍ばせる 晴れた時ばっかじゃない 湿った日が続いても腐らぬように  
たとえば100万回のうち たった一度ある奇跡 下を向いてばかりいたら 見逃してしまうだろう  
さあ 空に架かる虹を今日も信じ 歩き続けよう 優しすぎる嘘で涙を拭いたら 虹はもうそこにある

「一体何の意味がある？」 つい 損か得かで考えてる

でも たった一人でも笑ってくれるなら それが宝物  
誰の胸の中になんか薄暗い雲はある その闇に飲まれぬように 今日をそっと照らしていこう  
過去は消えず 未来は読めず 不安が付きまとう  
だけど明日を変えていくのなら 今だけがここにある

遙か遠く地平線の奥の方から 心地好い風がそのヒカリ運んで 僕らを包んでく

たとえば100万回のうち たった一度ある奇跡 ただひたむきに前を見てたら 会えるかな  
空に架かる虹を今日も信じ 歩き続けよう 優しすぎる嘘で涙を拭いたら 虹はほらそこに  
過去は消えず 未来は読めず 不安が付きまとう  
だけど明日を変えていくのなら 今 今だけがここにある きっと 虹はもうここにある

この曲は、2016年度後期NHK連続テレビ小説『べっぴんさん』の主題歌です。主演は芳根京子。

※戦後の焼け跡の中、娘のため、女性のために、子供服作りにまい進し、日本中を元気にかけぬけていくヒロインとその家族、そして、彼女の仲間たちが夢へと向かうお話です。

Mr.Childrenの曲ばかり紹介して申し訳ございませんが、私はこの歌詞の下線が引かれた部分が好きです。これを意識して、始業式に次のように話をしました。「昨年までやってきたことは、よかったことも失敗したことも消えることはありません。くよくよしても仕方ないよね。これからやることはどうなるか分かりません。だから不安だね。しかし、明日の自分をよりよくしていくには、今しかありません。校訓のように、ほんきで、なかよく、きまりよく毎日を過ごしていくことが、自分の成長につながります。ここにいる先生方も、ほんきでみなさんと向き合っています。だからみなさんもなかよく楽しみながらも、決まりを守って、ほんきでいろんなことにチャレンジしてほしいと思います。」これから桑っ子のみんなと100万回のうちたった一度ある奇跡を信じて最高の学校をつくっていきたいと思っています。